

【授業実践報告】

アクティブ・ラーニングで歴史系科目を展開してみても

加 藤 徹 (地理歴史科)

はじめに

2017年度、報告者は3年生の選択科目「歴史特論」（金曜日開講科目）を担当した。本校の選択科目は、火曜日・金曜日のそれぞれ5・6限に開講されており、科目の選択は2年次に行う。選択科目の履修及び単位取得が中央大学への推薦の条件にもなっているが、科目選択段階では生徒には担当教員が誰になるかは分からず、また生徒の想像していた授業内容と乖離があることもしばしばあって、受講している生徒がモチベーションかと思われれば、正直に言って厳しい現実があると思われる。

報告者は、授業回数が確保されており、定期試験も行うことが可能な1・2学期においては、5限に「日本と東アジアとの関連」を学ぶ授業を、6限には「オスマン帝国の通史」を学ぶ授業を展開した。ただ、3学期は1月のみの授業となるため、授業回数が3回しか取れなかったため、どのような授業を行うべきか思案していた。

そこで、2022年度の学習指導要領から地理歴史科に「歴史総合」なる必修科目が設置され、アクティブ・ラーニング（以下、ALと略す）を用いた授業形態になること、また2017年度3年生ー本校53期生ーは、1年次より学年主任・齋藤祐^{*1}（敬称略。以下同）が積極的に導入していたAL型授業に親しんでいた^{*2}こと、を踏まえて、ALで授業展開を行おうと結論を出した。

1 授業の設計

とはいえ、報告者は未だ嘗てALを行ったことがないー典型的なトーク&ショー

クの講義形式、報告者は自嘲的に「パッシブ・ラーニング」と呼んでいるため、まずはALを学ぶことから始めなければならなかった。中学社会科・高校地歴科でのALの実践報告などは、恐らく膨大な量が存在するのだろうが、限られた時間内で全てを読むことはおよそ不可能に近い。そのため、数冊の書籍および授業実践の報告・論文^{*3}を手に取り、最終的に「知識構成型ジグソー法」^{*4}（以下、ジグソー法と略す）を用いて授業を行うこととした。

ジグソー法は、一般的には3人1組のグループを構成する。グループのメンバーは、①それぞれに割り当てられた資料を読み込むエキスパート活動を行う、②メンバーが再集合して、お互いが読み込んだ資料について報告するジグソー活動を行う、③ジグソー活動で出た答えを教室全体で交流し、異なる考えや表現から学ぶクロストークを行う、その後各自が自分で答えを書き留めていく作業を行う。

報告者は史学専攻なので、ジグソー法と史学の方法論との近似性や、専門的な資料を用意しやすいという環境があるため、これを選択した。ただ、何分にも自身が初めての経験なので、今回の授業実践では、上記①・②を行うことに留めた。

2 授業内容の設定

方法論が定まった後は、テーマ設定である。先述の通り、1・2学期の5限に日本とアジアとの関係を学び、2学期で日本の戦国時代と海域アジアとの関連について講義したので、それに絡めたテーマ設定の方が授業としての連続性を持たせられると考えた。

そこで、中学校の「歴史」科目でもほぼ必ず教えられており、細部では海域アジアとの関連を持つ、長篠合戦を大テーマに設定した。長篠合戦といえば、「織田信長・徳川家康の連合軍が武田勝頼を撃退した戦い」という史実以上に、「先進的な信長の鉄炮隊が旧態依然の武田騎馬軍団を壊滅させた戦い」というある種のイドラが存在する合戦として有名である^{*5}。そこで、ジグソー法を

用いて長篠合戦の実像を知って貰い、歴史学の楽しさを少しでも体得して貰おうと考えた。

1月の授業回数が3回しかなかったため、初回では「長篠合戦を知る」ことを目標に設定した。ついで2回目では先述のイドラを破壊すべく「織田・武田双方の鉄炮隊編成を知る」ことを目標に設定し、最終回では、2回目の授業で織田・武田の軍隊編成に質的差異を見出せなかったことを受け、「織田軍の勝因・武田軍の敗因を知る」ことを目標に設定した。

3 授業の実践

2018年1月12日（金）の5限が初回のAL試行日となった。先述の通り2限続きの選択科目であるため、普段の授業とは異なり多少の時間の融通が利くので、はじめにグループ・エキスパートグループ決めを発表する。この時、3人グループ（受講数・当日の欠席者数から総人数が3の倍数にならないことの方が多かったため、各回共に4人グループが1つ出てしまった）、エキスパートグループ共に、1・2学期の成績を考慮し平準化してグループを設定した。

AL慣れしていると思っていた53期生ではあるが、ジグソー法を歴史系科目でやったことがないことから、少々戸惑いを覚えたようだ。また、報告者が学習内容に関して事前レクチャーをほとんど行わなかったことも災いして、ジグソー法では頭を悩ませている生徒が多数見受けられた。ただ、エキスパート活動のCグループでは良く声が出ており、活発なディスカッションが行われていた。これは3回目まで同じであった。

そこで翌週19日には、前回の振り返りと今回の簡単な授業の目的を話した上で、ジグソー活動に入らせた。エキスパートA、Bグループは相変わらず生徒間でのディスカッションが盛り上がっていないように見受けられたが、報告者が適宜机間巡視を入れたので、盛り上がらない乍らも前回よりは活発な討議が行われ、エキスパートの資史料読解が捗っていたようだ。

最終回となった26日には、5限でジグソー法の授業を行い、6限の一部の

時間を利用して、3回分の授業振り返りとして「講義形式の従来型授業と比較して良かったと思える点」を書かせた。

なお、文末に各回のエキスパート活動・ジグソー活動の資料を添付した（A5に縮小してある）。

4 生徒の反応

報告者が3年生の必修科目（2017年度の3年必修の地歴科目は、学校設定科目の「戦後世界」と文系必修の「日本史」。報告者が担当経験のある時期は、文系必修の「世界史」「戦後世界1」であった。）を担当する際、必ず最後の授業時に「授業の感想」を提出させていた。生徒も、記名のアンケートのためか、報告者に配慮してか、「分かり易い」という意見を多く出していたので、「パッシブ・ラーニング」でも悪くはない、と考えていた。だが、生徒は正直なもので、ALの方が普通の授業－1・2年次に報告者の授業を受けた生徒も当然含まれる－よりも能動的で眠くなりにくい、と答えた者が非常に多かった。その中でも、ALの狙いをよく理解している生徒のコメントをいくつか紹介しよう。なお、コメント中の誤字などは適宜報告者が訂正している。

3年3組・I君

社会科の授業は、生徒が受け身となってしまうことが多いが、アクティブラーニングは能動的に活動することができるので、自分で考える力を身につけられるという点で良かったと思う。また、普通の授業では、資料（グラフ・データ・文献）は補足で使われたり、そこからわかることを先に先生が説明してしまうことが多いが、アクティブラーニングは、その活動を通して資料を読み解いて、それを基に考察する力を伸ばすことができたという点で良かった。さらに、班でそれぞれ違う情報を持ち寄ることで、そこから新たな発見をしたり、内容を整理することができたと思う。アクティブラーニングは、講義型の授業では感じることはできない、発見の喜びを感じることができるという点でも優れている

るといえると思う。

3年5組・Yさん

自分たちが積極的に参加することが出来るので、内容として難しいものもあったけれど、理解しやすかった。

また、ジグソーのように、班員で協力し合って答えを纏めるのは、とてもやりやすかった。それぞれA・B・Cの内容をしっかりと理解した1人が2人に向けて細かく説明するので、個別指導のようで分かりやすく感じた。また、その場で疑問に思ったことをすぐに質問できる体制もすごくいい。

A・B・Cそれぞれが理解したことを説明し合うだけではなく、毎回まとめの部分で3人で考え、答えを出すのは考えが深まり、非常に良いと思った。

3回しか出来なかったけれど、とても有意義な時間を過ごせた。

3年5組・K君

今までの授業はただ板書を写して話を聴くスタイルだったので、どうしても眠くなったり頭を動かさずになりがちだった。今回のアクティブラーニングは自分で考えるだけでなく班員にうまく伝えることも重要であり、また班員がまとめた内容を簡潔に記して理解するという技能も必要だったので、中々骨が折れたが、楽しかった。人に物を伝える時に、一体何を優先すれば良いのかと熟考したりもした。例えば長篠の地名は細かく言うべきなのか、家臣は俗名でOKなのか、数字は出すべきなのか。必要ない時もあるが、なかったら前後の流れを掴めないこともあるので、臨機応変に取り組む重要性も理解した。

3年3組・Tさん

今回のアクティブラーニング活動において最も良かった点は「ジグソー活動」であると思う。ただの班活動では1人が内容を十分に理解できていなくても多少問題ないが、ジグソー活動においては、各エキスパート活動で正しく理解

しておかねば班全体の活動が進まない。また、ジグソー活動の班のメンバーは、他のエキスパートの情報が全くない。何も情報を持っていない人に対して、いかに分かりやすく説明するか、専門用語をどのように解説するか、自らの理解力や国語力が問われる。授業に主体的に取り組むことができるのはもちろんのこと、情報を正しく理解し、その上で自分の中で情報をかみくだいて分かりやすく解説するという様々な力を伸ばすことができるのだ。

おわりにー或いはALへの危惧ー

上記の如く、生徒の反応は軒並み肯定的であった。だが、報告者も感じているALへのある種の危惧・懸念を見抜いている生徒がいたことの方が、今回の実践での最大の成果だったと思う。その生徒のコメントを部分的に紹介しよう。

ただし、A・B・Cの各グループでの活動内容は与えられたプリントに沿って行えば、大方うまくいく、というものであり、問いを立てるところから日々やっている私としては少し物足りなかった。

ジグソー法であれ、KP法であれ、どのような方法を採用するにせよ、行動自体はアクティブだが、テーマ設定そのものは全くアクティブではないのである。殊に、2022年度より実施される「歴史総合」なる必修科目では、教科書・図表に予めテーマが設定されており、それについてグループワークを行わせ、そのワークの取り組みを成績認定に利用する。極めて受動的にALが展開されるという、何とも皮肉な新科目になるようだ。ALは手段の一形態に過ぎないのに、それが「目的」になってしまっていないのだろうか。

今ひとつ、気になった点がある。ALを学ぶために、参考文献には挙げなかったが、書店で多くの書籍を手にとった。その際に、多くの書籍で「学校改革」の話が出ていた。AL実践前はその意図が分からなかったが、実践してみて理解出来た。一人の教員がALを実践したところで、同一教科の他の教員は勿論

のこと、他教科の教員が実践しなければ、生徒に与える好影響は限定的にならざるを得ないし、生徒側からALを実践しない教員に対して「〇〇先生はなんでALで授業をやらないのか」と言った際に「ALをやっている先生の方が少数派なんだ」などとやり返すことは容易に想像が出来、最終的に教員間の深刻な分断に繋がりがかねないだろう。

最後に、ジグソー法での実践を試みたが、これを通年・毎時実践するのは非常に困難だと感じた。それは教材準備に非常に時間がとられてしまうからである。特に担当授業数が多い、報告者のような非常勤講師のような環境だと、なおさら負担になる。少なくともジグソー法でのAL実践には、他の教員と協力して教材準備を行うことが欠かせないだろう。

今回はジグソー法のみ活用したが、それでも生徒の好反応を引き出すことが出来た。教員側の工夫次第で、より良い授業が提供出来ることは云う迄もないので、試行錯誤をしつつ、ALの（教員にとっても）効率的な運用を考えていこうと考えている。

*1 国語科教員。現在は人材交流制度を利用して中央大学附属中学校へ赴任中。都留文科大学非常勤講師。最新の論文に「思考ツールで『舞姫』の解釈を深めよう！」・「思考ツールを活用して2,000字のレポートを書こう！」（共に大滝一登・高木展郎編『新学習指導要領対応 高校の国語授業はこう変わる』三省堂、2018年）、「スマホで夏目漱石『こころ』論を書いてみよう」（野中潤編『ICTで変える国語授業—基礎スキル&活用ガイドブック』明治図書、2019年）などがある。

*2 本校では3年生全員に卒業論文の提出が課されている。その為、本校の国語科では、「探究マップ」という独自のツールを開発し、論理的な作品分析を行っている。「探究マップ」については、webサイト「Chuo Online」の、齋藤祐「高校生の卒業論文作成～問う力、推論する力を育む～」(<https://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/education/20100819.html>)、同「高校生

のための論文アウトラインの作り方―付箋で「探究マップ」―」(<https://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/education/20150604.html>)、同「「探究マップ」で論証を組み立てる―俯瞰とメタ認知でAI時代を乗り越えよ―」

(<https://www.yomiuri.co.jp/adv/chuo/education/20180123.html>)を参照のこと。

- *3 後掲注4掲載書籍の他に、鳥山孟郎『授業が変わる 世界史教育法』(青木書店、2008年)、福井憲彦・田尻信壹編著『歴史的思考力を伸ばす世界史授業デザイン 思考力・判断力・表現力の育て方』(明治図書、2012年)、後呂健太郎・神谷一彦・関谷明典・棟安信博『すぐ実践できる!アクティブラーニング 高校地歴公民』(学陽書房、2016年)、皆川雅樹「高校日本史におけるアクティブラーニング型授業の実践」(『紀要』(専修大学附属高等学校)第33号、2013年)、同「アクティブラーニング型授業と歴史思考力の育成―高大連携・接続での汎用的な歴史教育を考える―」(『紀要』(専修大学附属高等学校)第34号、2015年)などを参照。
- *4 東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構(東京大学CoREF)が、2008年度より全国の小中高等学校と連携してジグソー法を用いた授業作りを行っており、その理念・実践例をまとめた、三宅なほみ・東京大学CoREF・河合塾編著『協調学習とは 対話を通して理解を深めるアクティブラーニング型授業』(北大路書房、2016年)と東京大学CoREFのHPを参考にした。
- *5 長篠合戦については、平山優『長篠合戦と武田勝頼』(吉川弘文館、敗者の日本史9、2014年)・同『検証 長篠合戦』(吉川弘文館歴史文化ライブラリー、2014年)に詳しい。なお、ジグソー活動用のレジュメ作成でも多くこの2書に拠った。

エキスパート資料A

高 3 組 番氏名 _____ (班: _____)

内容理解→長篠合戦の従来説を知ろう

① 『日本戦史長篠役』（参謀本部編、1903 年）

信長素ヨリ甲軍ノ騎戦ニ長タルヲ知り之ヲ防カンカ為メ（注：一ニ云フ岐阜ヲ発スル時已ニ諸隊ニ令シ兵卒ヲシテ人毎ニ一朶ノホー把ノ縄ヲ携ヘシメタリト）連子川（注：連子橋下ノ水ノ上流ナル溝渠ヲ総称ス）ニ阻シテ柵ヲ樹エシメ諸隊ヲ其後方ニ配備セントシ全軍ノ銃手（注：一万人）ヨリ三千人を選抜シ佐々成政・前田利家等（他三人、野々村幸久・福富貞次・塙直政）ヲシテ其司令タラシメ（注：之ニ丹羽氏次・徳山則秀ヲ属ス）之に戒メテ曰ク勝頼勇ヲ持ミ謀無ク而シテ其兵ハ騎戦ヲ好ム故ニ柵ヲ以テ之ヲ遮リ銃ヲ以テ之ヲ殲サントス。然レトモ彼ノ方サニ前進スル時遽ニ銃ヲ発スル勿レ其既ニ逼ルニ及ヒ千挺ツツ代ル々々発セシメヨト又其長柵中ニ三十間乃至五十間毎ニ門戸ヲ置キ逆撃ニ便ス

② 『日本歴史大事典』「長篠の戦い」の項目（三鬼清一郎氏執筆）

（前略）信長勢は長篠城の西方の設楽原に布陣し、柵を設けて騎馬の進入を防ぎ、その後方に鉄砲隊を 3 組に分けて迎え撃った。騎馬戦を得意とする武田勢は柵に阻まれて突入することができず、多数の死傷者を出して敗退し、甲府へ帰陣した。この戦いは、騎馬を中心とする中世的な戦法に対して、鉄砲足軽を主体とする集団戦の優位を実証したのとして、大きな意義をもっている。

③ 『国史大辞典』「長篠の戦い」の項目（山本博文氏執筆）

（前略）鉄砲の組織的活用の画期がこの戦いであった。信長は鉄砲隊を三段に重ねて、第一列の兵は射撃のあと後ろにさがり、第二列、第三列が撃つ間に弾を込めるというように、連続的に火縄銃を使用する戦法をみだした。この戦法の大成功により、武田氏に代表される騎馬中心の戦法から鉄砲主体の戦法へと戦の主流が移った。

▶長篠合戦での織田信長の作戦はどのようなもので、それがどのような意義を持ったのか、まとめてみよう。

エキスパート資料B

高3 組 番氏名 (班:)

内容理解→従來說への批判を理解しよう

① 『信長公記』(織田信長家臣の太田牛一による記録。版本の系統が複数ある。信頼性は高い、とされる)
信長は家康陣所に高松山として小高き山御座候に取上られ、敵の働を御覧じ、御下知次第働くべきの旨、兼てより堅く仰含められ、鉄砲千挺ばかり、
佐々藏介(成政)・前田又左衛門(利家)・野々村三十郎(正成)・福富平左衛門(秀勝)・塙九郎左衛門(直政)
御奉行として、近々と足懸けられ御覽候。前後より攻められ、御敵も人数を出し候。

② 藤本正行『信長の戦争—『信長公記』に見る戦国軍事学』(講談社学術文庫、2003年)第五章「長篠合戦」
長篠合戦における織田軍の勝因について、一番にあげられるのが、鉄砲を用いた“新戦術”である。具体的に
いえば、戦線全体に三千挺の鉄砲*を、千挺ずつ横三段に備え、各段が交替で一斉射撃を繰り返し行うというものである。交替で射撃を繰り返させたというのは、銃の発射準備中に敵に攻め込まれることを防ぐための配慮という。(中略)

だが、はたしてこの戦術を、天才的といえるのであろうか。早い話、織田軍の鉄砲が一斉射撃をするためには、武田軍が織田軍の銃隊全員の射程距離内に同時に入る必要がある。だが、武田軍が騎馬武者と歩行武者が入り交じっていること、戦場が平坦でないことなどを考えれば、彼らが織田軍の銃隊全員の射程距離内に同時に入ることなどどうてい考えられないではないか。

現実には、武田軍は合戦の常道に従い、特定の場所に攻撃を集中するであろう。そうした場合、攻撃の集中した場所からは射程外になる銃手や、地形的にその場所を見通すことができない銃手が出てくるはずである。だが、彼らも一斉射撃の列に加わった以上、敵に届かないとか敵が見えないからといって、勝手に射撃を止めるわけにはいかない。無駄弾になることを承知のうえで、発射の号令にあわせて引き金を引き、つぎの列と交替しなければ、全体が混乱状態におちいるからである。これほど不経済なことはいない。

だいいち、いったい誰が、どの位置から、どんな方法を使えば、三千もの銃手に一斉射撃の号令を送り続けることができるのであろうか。(後略)

(* 藤本氏は、当時の『信長公記』の版本研究に基づき、信頼できる版本の『信長公記』では鉄砲が千挺であるが、池田家本『信長公記』や小瀬甫庵『信長記』に三千挺とあること、加えて『日本戦史長篠役』にも三千挺とあることから、敢えて三千挺と記している。藤本説では鉄砲は千挺。なお、藤本氏は甫庵『信長記』の史料価値を低いもの、としている。)

→長篠合戦での従來說にはどのような批判が上がったのだろうか。

エキスパート資料C

高3 組 番氏名 (班:)

内容理解→最新の学説を整理しよう

① 尊経閣文庫版『信長公記』(近年発見された、太田牛一オリジナルのもの1つ)

信長は家康陣所に高松山とて小高き山有り、是へ取り上げられ、敵の働を御覧じ、御下知次第に仕るべきの旨仰せ含められ、鉄砲三千余挺に御弓之衆を加えられ、作の内に備え置かれ、佐々内蔵佐・前田又左衛門尉・塙九郎左衛門尉・福富平左衛門尉・野々村三十郎、御下知のごとく近々と足輕懸けられ候処に案の如く御敵も人数を出し、(後略)

② 小瀬甫庵『信長記』の該当箇所

- a 千挺づつ放ち懸け、一段づつ立替り立替り打たすべし……
- b 家康卿より出し置かれたる三百人の鉄砲足輕渡し合せ、爰を先途と込替へ込替へ放し懸けたる……
- c 彼の(鉄砲奉行の)五人下知して、三千挺を入替へ入替へ打たせければ……

立替り…「交代する」の意味だけ ある場所を明け渡し、そこに入れ替わるという意味はない
 入替へ…『羅葡日辞典』によれば「予備の兵、イレガエノムシャ(入替えの武者)、スケゼイ(助勢)、ドウゼイ(動勢)」 援護のために予備として控える軍勢が参戦すること
 段…部隊を作戰上の要所に配備する意味 またはその配備された軍勢のこと

③ 明における日本軍の衝撃

明は、秀吉の朝鮮出兵時に李氏朝鮮へ援軍を派遣したが、西洋式の火縄銃を巧みに操る日本の戦術に全く不慣れであり、大損害を被った。そこで、朝鮮の役最中に投降日本兵による明軍鉄砲隊が成立していく。

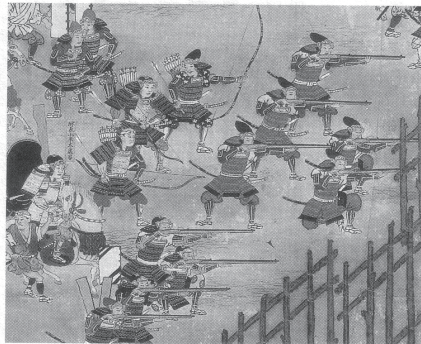
ex) 明の記録『経略復国要編』卷六「議乞増兵益餉進取王京疏」

もし倭奴が分番休迭の法を用い、ときに遊撃の騎兵を出して我が軍を掻き乱せば、我が軍は進んでも退却できない

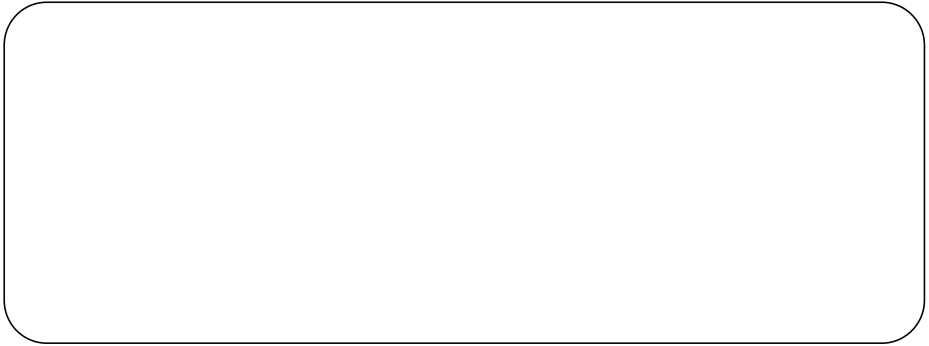
▽ 『軍器図説』



▽ 『長篠合戦図屏風』



⇒長篠合戦の最新説はどのようなものだろうか。



シグソー活動

高 3 組 番氏名 _____ (班 : _____)

エキスパート活動で得た知識をそれぞれ相手に説明して、まとめてみよう

エキスパート A 長篠合戦の従來說

エキスパート B 1980 年代頃からの従來說批判

エキスパート C 最新の研究

次回に向けて…どのような事を調べれば、長篠合戦の織田・徳川軍の勝因・武田軍の敗因を知ることが出来るだろうか、話し合ってみよう。

エキスパート資料A

高 3 組 番氏名 (班:)

内容理解→戦国大名の軍隊の構造を知ろう

① 平井上総『兵農分離はあったのか』（平凡社、2017）

a まず、原則を確認すると、武士・奉公人は給地をもらい、軍役を賦課されて戦闘員として働き、百姓は年貢を納めて非戦闘員として陣夫役を勤める、という身分別の役割分担がある。これは、戦国時代にも、江戸時代にも共通した原則であり、身分と役という点のみから兵農分離を語るならば、どちらの時代も兵農分離が基本であったと言える。…一方、その身分別役負担の原則を破るかのような、百姓の軍事動員という制度を戦国大名が採っていた。これは、戦闘員不足を百姓の臨時徴発で補おうという窮余の策であるが、恒常的な動員ではないこと、日数や働く場所が武士・奉公人とは区別されていることなど、本来の身分別負担の原則が動員内容に色濃く反映されていた。(82 頁)

b 織田家臣の本人ならびに妻子の安土城下町居住について、否定的事例ばかりを挙げてきた。ただ、これは本人や妻子の居住が家臣団全体におよぶものではなかったという点を指摘しただけであり、中には弓衆・馬廻衆のように本人・妻子ともに安土に住む者や、本人は住んでいなくとも、人質として妻子を提出していた者もいたであろう。ただ、一部の家臣のみの居住・人質であれば、織田政権だけの特徴とは言えない。信長と関係する他大名として武田勝頼の例を挙げよう。天正 10 年（1582）に武田氏が滅びる際、武田一族で有力国人であった穴山信君が、勝頼の拠点甲府に人質として出していた妻子を脱出させて信長側に寝返っている（『信長公記』、三八三頁）。武田氏の元でも、一部の一族・重臣は妻子を人質として大名の城下に居住させていたのであった。(189～190 頁)

② 平山優『検証 長篠合戦』（平凡社歴史文化ライブラリー、2014）

さて問題となるのは寄親たる彼らの麾下に編制された同心・寄子衆である。その多くは、武田氏より棟別役などの諸役賦課を免除され、参陣を命じられた軍役衆（同心衆・御家人衆・直参衆などとも呼ばれる）であり、家産を郷村に置く土豪・地下人・有徳人層であったことは事実である。だがこれをもって、武田軍＝「兵農未分離」の古い体質の軍隊と規定するのは早計であろう。

信長の軍隊も、既述のように、本国尾張で土豪層を旗本にして動員していたし、征服地においても、地域の国衆や土豪層をそのまま織田氏に急襲し、織田重臣の与力などにするので編制されていた。つまり、滅亡した戦国大名の家臣や軍役衆らをそのまま編制しているのである。とりわけ土豪層の多くは、村に家産を展開している在郷被官（武田氏の軍役衆・御家人衆に相当する）に他ならなかった。(194 頁)

➡織田軍・武田軍の構造に質的な差異はあったのだろうか。

エキスパート資料B

高 3 組 番氏名 _____ (班: _____)

内容理解→織田軍における鉄砲編制の特徴を知ろう

① 平山優『検証 長篠合戦』（平凡社歴史文化ライブラリー、2014）

a 織田信長といえば、鉄砲の大量装備と、その天才的な戦術考案により天下統一に向けて急成長を遂げたというイメージが大方であろう。ところが信長と鉄砲に関する専論はきわめて少なく、そればかりか意外なことに史料もまた稀少なのである。…信長自身が発給した文書を調べてみると、鉄砲に関する記載は意外なほど少なく、管見の限り、それはわずかに十五点を数えるのみで、ここからは信長が大量の鉄砲を装備していた形跡を読み取ることが難しい。むしろ、発給文書における鉄砲関係の記事に限って言えば、信長と比較して後進性ばかりが取りざたされる武田氏の方が、鉄砲の保有を示す記事が登場する時期や文書数も、遥かに彼を凌ぐ。（49～50 頁）

b 武田氏も弓衆と鉄砲衆は別々の編制であったが、合戦の時は共同で編制されるのが常態であった。『信長記』（注：太田牛一『信長公記』のこと）の記述を見ても、実は織田軍も同じで、弓衆と鉄砲衆は別々の編制になっており、時にはそれぞれ単独で、あるいは共同で合戦に参加しているように読める。（中略）信長の鉄砲隊とは、彼に直属する旗本鉄砲衆と、各武将がそれぞれ保持する鉄砲とに区分され、必要に応じて各武将から鉄砲放（銃兵）を提出させ、臨時編制したものが「諸手之鉄砲」である。つまり、信長の保持する鉄砲隊は、すべてが彼に直属する旗本鉄砲衆ではなかったことがはっきりする。（51～3 頁）

c ここ（「明智光秀家中軍法」）で判明することは、①知行高 100 石につき軍役人数 6 人を基本に指定しつつ、②馬乗（馬上）一騎は歩兵二人に相当するとし、③すべての家臣に馬乗と鎧の負担を指示した、④これに対し、織田軍の象徴とみなされる鉄砲は知行 300 石以上の者でなければ負担を義務づけられることはなかった（注：300～500 石あたり鉄砲 1 名、500～600 石で 2 名、600～800 石で 3 名、800～900 石で 4 名、1000 石で 5 名。）、⑤逆に騎馬はすべての家臣に賦課されており、明智光秀は騎馬を重視していたと指摘しうる、⑥そして注目すべきは、弓の動員規定がないことである、これは上杉氏の場合と共通した特徴あり、弓から鉄砲へという装備転換が図られていた情況が看取できる、などである。…この知行石高と軍役量との対応を、武田氏や北条氏と単純に比較することは困難である。しかしながら、北条氏は馬乗一騎は歩兵三人、100 貫文（注：1 貫は約 10 万円）につき 20～30 人の負担などであることを勘案すると、むしろ織田軍よりも東国戦国大名の軍隊の方が、軍役負担は重い傾向にあると指摘出来るかも知れない。（200～2 頁）

➡織田軍における鉄砲隊の状況はどのようなものであったか。

エキスパート資料C

高3 組 番氏名 (班:)

内容理解→武田軍における鉄砲編制の特徴を知ろう

① 平山優『検証 長篠合戦』（平凡社歴史文化ライブラリー、2014）

a 確実な史料に、武田氏の鉄砲衆が登場する初見は、弘治元年（1555）である。以下、著名な『勝山記』『妙法寺記』の記述を紹介しよう。

アサヒノ要害エモ、武田ノ晴信人数ヲ三千人、サケハリヲイル程ノ弓ヲ八百丁、テツハウヲ三百カラ御入レ候

これは、弘治元年の第2次川中島の戦いにおいて、武田氏の調略に応じて、上杉方から離反し、信濃善光寺近くの旭山城（長野県長野市）に籠城した信濃国衆栗田鶴寿を支援すべく、援軍 3000 人、鉄砲 300 挺、弓 800 張を派遣したという記録である。…しかし、この当時の東国大名武田氏が 300 挺の鉄砲を揃えていたことは特筆されるべきであろう。（85 頁）

b また、永禄十～十二年（1567～69）頃のものとして推定される武田信玄旗本陣立書をみると、鉄砲衆として城和泉守景茂・本郷八郎左衛門尉・曾禰七郎兵衛・落合市丞・小幡又兵衛昌盛・玉虫助大夫定茂・関甚五兵衛・今井九兵衛昌茂・六嶋兵右衛門尉守勝・甘利郷左衛門尉信康が登録されており、彼らが鉄砲放を率いた指揮官で…旗本鉄砲衆が確かに編制されていたと推察される。…何らかの事情で、自身は軍勢を率いて参陣しない家臣に対して、武田氏が鉄砲衆の派遣のみを要請するという方法は、長篠合戦時に織田信長が長岡藤孝らに要請したものとまったく同じである。武田氏は、出陣にあたって、参陣を命じる家臣と残留する者とを厳密に区分していた。この時に、堺目の城砦や本領などに残留する家臣に対して、彼らが所持する鉄砲と鉄砲放（銃兵）のみを「加勢」として派遣を要請したのであろう。…このように武田氏の鉄砲衆は、旗本鉄砲衆、「加勢」の鉄砲衆、知行役の鉄砲衆という方法で戦場に集められ、鉄砲衆だけで部隊が編制されたのであろう。このように、武田氏の鉄砲衆も、原則として「諸手拔」により編制されたものと考えられる。（103～7 頁）

c 武田氏は家臣達に軍役を賦課するにあたって、鉄砲の装備を指示するようになる。これは永禄五年（1562）を初見とする。…弓・鉄砲を携行する家臣を対象にして、その軍役員数に占める弓・鉄砲の割合を見てみると、次のような特徴が認められる。弓は家臣 12 人（うち島津泰忠のみ数量不明）が賦課されており、それは 11 人の軍役員数総数 336 人に対して、弓は 40 人（張）となり、軍役員数に占める割合は約 11.9%となる。鉄砲は、家臣 18 人が賦課されており、その軍役員数総数 381 人に対して、41 人（挺）で、軍役員数に占める割合は約 10.7%となり、弓とほぼ同じである。参考のため、上杉氏の場合を紹介すると、天正三年（1575）の「上杉氏軍役帳」では、軍役員数総計 5514 人に対して、鉄砲は 316 挺を数え、その割合は約 5.7%である。ちなみに、「上杉氏軍役帳」には、弓がわずか 5 張しか登録されていないのが特徴で、これは上級家臣には弓よりも鉄砲の調達をさせていた結果とみられる。また、北条氏の場合をみると、軍役員数総計の中で占める割合は、鉄砲が 38%、弓が 3.4%である。北条氏も弓から鉄砲への転換を図っていたものであろう。（99～102 頁）

⇒武田軍における鉄砲隊の状況はどのようなものであったか。

シグソー活動

高 3 組 番氏名 (班 :)

エキスパート活動で得た知識をそれぞれ相手に説明して、まとめてみよう

エキスパート A 戦国大名の軍隊の構造

エキスパート B 織田軍における鉄炮

エキスパート C 武田軍における鉄炮

今回のまとめ…織田軍・武田軍に質的な差異はあったのだろうか？

エキスパート資料A

高3 組 番氏名 (班:)

内容理解→織田軍の強みを知ろう

① 平山優『検証 長篠合戦』(平凡社歴史文化ライブラリー、2014)

a まず、近江の国友村が織田信長の大量注文を受けて鉄炮を製造したという事実は、確実な史料では確認できないのである。織田氏と国友村の関係が明確になるのは、浅井長政滅亡後の天正二年(1574)八月のことである。ただし、戦国期の国友村で鉄炮が製造されていたことは間違いない。…国友村産の鉄炮は当時(注:永祿前半、1560年頃のこと)すでにブランド化しており、近隣諸国で著名であった可能性がある。…もし、信長が国友村に鉄炮を発注できるとすれば、天正元年九月の浅井氏滅亡後のことだろう。(59～60頁)

b 堺の商人千宗易から、長篠合戦直後の天正三年(1575)年八月、越前出陣にあたって鉄炮玉1000発を贈られており、堺との密接な結びつきを窺うことができる。贅言するまでもなく、堺は南蛮貿易の拠点であり、鉄炮は貿易によってもたらされたものであろう。また、堺でも鉄炮の製造が行われていたから、これも信長のもとに入ったとみて間違いない。また信長は、天正元年3月、武田信玄の西上、浅井・朝倉連合軍の攻勢という危機的状況に直面した際に、鉄炮・玉薬・兵糧の大量調達を指示しており、金子1、200枚で調達できれば安いものだと述べている。この時調達を信長から命じられているのは、細川藤孝と荒木村重である。彼らは山城に在陣しており、この時に調達できるとすれば京都か堺からであろう。(60～1頁)

c 長篠決戦場石座神社付近出土の鉄炮玉5点を追加分析し、合計20点(注:長篠城および長篠決戦場から出土している鉄炮玉の試料の数)の化学分析を総括し、鉄炮玉の材料の鉛は、①日本産70%、②華南産20%、③N領域10%と結論づけた。つまり、織田・徳川・武田三氏が使用した鉄炮玉の材料は、おおよそ70%が国産の鉱山から産出された鉛、30%が輸入によって日本にもたらされた鉛であったのである。このうち注目すべきは、N領域産の鉛が2点存在することである。このN領域とは…、近年、タイの中部カンチャナブリー県にあるソントー鉱山産であることが確定された。しかも、鉛同位体比研究の成果によると、このN領域産の鉛は、日本には室町時代前期まではまったく確認されず、突如戦国時代に登場するが、「鎖国」を境に忽然と姿を消してしまい、江戸時代の資料には一切見られなくなることが判明しており、確実に南蛮貿易によってもたらされたものと判断できる。…以上のように、戦争が激化し、鉄炮の使用が年を追うごとに増加していた戦国・織豊期は、鉄炮玉の需要が拡大し、国産鉛では対応できず、輸入が推進されたわけであり、それは東南アジア産と中国華南地域、朝鮮半島からのものであった。そしてそのいずれもが、南蛮貿易によって日本に輸入された。(73～5頁)

➡織田軍の鉄炮使用における「強み」とは何であろうか。

エキスパート資料B

高3 組 番氏名 (班:)

内容理解→武田軍の弱みを知ろう

① 平山優『検証 長篠合戦』(平凡社歴史文化ライブラリー、2014)

a 永禄十二年の軍役条目に、「一、知行役之鉄炮不足ニ候、向後用意之事、付、可有薬支度、但有口上」とあるように、むしろ武田氏にとって深刻であったのは、家臣に鉄炮と玉薬を多く準備させようとしても、それが困難であったことが大きい。それが中部山岳地帯を領国とする武田氏と、畿内やその近国を掌握していた織田信長との差だったのである。(108頁)

b 江尻城代穴山信君が、某年九月晦日、松木与左衛門尉ら10人の駿府商人衆に「半手商売」を依頼した文書がある。これは武田氏と徳川氏の勢力の境界にあたる大井川中流域の水上郷(当時は武田方、限静岡岡原郡中川根町)において、河原端で双方の商人が出合い、商売が行われており、信君は、その取引にあたって内容次第では援助を与える約束をしたものである。もともと駿府商人衆は、敵味方のナワバリの境界線で、敵方の商人衆としばしば落ちあい、「償銭(身代金)」を出し合って、互いに乱取りされた捕虜の買い戻し交渉を行っていた。武田氏はこれを黙認していたが、信君を通じて、その交渉に鉄炮と鉄の取引を持ちかけるよう指示し、うまくこれに成功したら、2、300疋の夫馬を差し遣わすようにしようと約束している。…これは鉄炮を敵国の商人を通じて入手しようとしていたことを示す。(109～110頁)

c 武田氏は、鉄砲玉の材料鉛をどのように入手したのであろうか。既述のように、武田領国の甲斐・信濃には、鉛山は確認出来ない。そのため、武田氏は、外国産・国産を問わず、すべての鉛を他国からの輸入に頼っていたと考えてよいだろう。戦国期に流通していた鉛は、既述のように国産と南蛮貿易の輸入品の二本立てであった。このことは、武田氏の鉄砲装備は、すべてにおいて物流上の壁に直面していたといえそうである。…だが、鉛の確保に限界を感じていた武田氏は、銅玉の確保に力を尽くしている。その原資は銅銭であった。このうち、悪銭を鋳つぶして鉄砲玉への転用に踏み切ったのである。武田氏は、甲斐国富士御室浅間神社の神主に「鉄砲玉の御用に候、悪銭これあるまま納るべく候、黄金なりとも郡内棟別なりとも、望み次第に下し置かるべきものなり」と指示し、上納してくればその補償として、黄金でも都留郡の棟別銭でも与えると述べている。…興味深いことに隣国の北条氏(注:領国は相模・武蔵・上野など)も、鉄砲玉の入手に苦しみ、その確保に狂奔していた事実がある。天正15年(1587)十二月、羽柴秀吉との対立を深めた北条氏は「天下之御弓筋」と呼ばれる非常事態宣言を行い、領国全域に動員を指示した。この一環として、北条氏照(注:当主北条氏政の弟、八王子城代)は同16年一月、武蔵国多摩郡愛染院、玉泉寺、同国入間郡茂呂大明神などに、世の中が平和になったら鋳直して寄進するからと、「鐘」の借用を求めた。これは鉄砲玉の原料として鋳つぶして利用されたのであろう。(118～122頁)

→武田軍の鉄砲運用に関する「弱み」とは何であろうか。

エキスパート資料C

高3 組 番氏名 (班:)

内容理解→武田軍における名誉の意識を知ろう

① 平山優『検証 長篠合戦』（平凡社歴史文化ライブラリー、2014）

a 『軍鑑*』を見ていくと、合戦場での戦功について、次のようなランク付けが記載されている。

- 一ニ一番鎧、二ニ二番鎧、三ニ場中の高名、四ニ鎧下の高名、五ニくづしきわの高名、六ニ弓にての鎧脇
七ニ鉄炮にての鎧脇

このうち、一番鎧、二番鎧は特に説明する必要はなかろう。四の「鎧下の高名」については後で検討する。次の五の崩し際の高名とは、敵を総崩れに追い込むのに貢献したことをいい、六・七の弓・鉄炮の鎧脇とは、弓・鉄炮で合戦に参加していた兵卒が、鎧衆の脇を固め、その援護射撃をして戦功を上げたことを指す。

これらの中で、一番鎧、二番鎧に次ぐ高名として武田軍内部で認定されているのが「場中の高名」である。では、この聞き慣れぬ「場中」とはいったい何であろうか。…合戦場では敵味方双方の距離が一、二町（注：1町は約108m）ほどになると、まず鉄炮の射撃が始まり、武田軍は敵に向かって距離を詰めていくという。やがて三十間（約54m）ほどの距離になると、今度は弓の射程に入るので、鉄炮衆とともに弓衆の射撃が開始される。やがて双方の距離が十四、五間ほどになると、敵味方双方の中から四、五間ほど進み出て、弓や鉄炮を撃つ剛胆な武士が出てくるという。その距離は五、六間にまで近づくと、この矢玉が激しく飛び交う場所が「場中」である。やがて、前に出て弓や鉄炮を撃っていた武士達の中には、矢玉に当たって戦死したり深手を負って倒れ込んだりする者も当然始まるわけだが、それを見て自ら「場中」に飛び込んでいき、前に出てきていた敵を討ち取り、首級をあげて自陣に引き揚げることを「場中の高名」というのだという。（219～222頁）

（*『軍鑑』…『甲陽軍鑑』のこと。武田家重臣の春日虎綱<いわゆる高坂弾正昌信>の一族が残した武田家に関する記録。かつては信頼性が低いとされたが、現在は史料価値が認められている。）

b 敵の攻撃、反撃が厳しいところを攻めあがり、戦功をあげることは、一番鎧や一番手柄などとされ、武田軍では最も名誉なこととされていた。…武田軍では敵之防備が最も弱いところに攻め込んだ者を「一番手柄」に認定していた。なぜなら、敵の防備が最も弱い所と武田軍が判断した場所ほど、敵もそれを十分に認識しており、そこを守るために弓や鉄炮が数多く配備されているからで、だからこそそこを突破して乗り込むことは名誉なことであるという考え方があったという。（224～5頁）

c 敵陣に接近し、…敵と渡り合う打物戦に突入した場合、一番鎧や二番鎧、あるいは一番手柄などを立てた者が、結局、敵の銃弾・矢・刀槍などで次々に倒され、さらにもに突入した戦友達が相次いで戦死傷して脱落していき、味方の人数が次第に少数になっていくことも当然あった。そうした絶体絶命の状況下で、恐慌状態に陥らず踏みとどまり、命を顧みずに奮戦した者は、最終的な一番鎧と認定される可能性を保持し、武田軍が形勢を逆転した場合には、侍として最高の榮譽を受けることができたのである。（227頁）

⇒武田軍の「名誉意識」をまとめ、長篠合戦でどのような行動に出たと想定できるだろうか。

シグソー活動

高 3 組 番氏名 _____ (班 : _____)

エキスパート活動で得た知識をそれぞれ相手に説明して、まとめてみよう

エキスパート A 織田軍の鉄炮運用に関する「強み」

エキスパート B 武田軍の鉄炮運用に関する「弱み」

エキスパート C 武田軍の名誉意識

今回のまとめ…長篠合戦で、武田軍の名だたる重臣が軒並み討ち死にする結果となったのは、どのような要因があるのだろうか？